聖霊降臨後第１８主日（特定２３）　　神様と共にいることの大切さ　　２０２２．１０．９．

今日の福音書は、イエス様が１０人の重い皮膚病を患った人々を癒したのですが、そのことを感謝して、イエス様のもとへ帰ってきたのは、外国人であるサマリア人ただ１人だった、という話です。

このお話の最後にイエス様が帰ってきた人に言ったのは、「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」という言葉でした。「病気が回復したのは１０人でしたが、信仰によって救われた人はこの人だけだった。」ということでしょう。

ほかの９人は病気にかかる前の生活に戻ったのですが、この帰ってきたサマリア人は、『イエスの足もとにひれ伏して感謝した。』と書かれています。今までサマリア人がゲリジム山で神様に礼拝していた伝統的な信仰から抜け出して、イエス様を信仰の対象とした、新しい生活に入ったのです。

しかし、他の９人も病気は治ったのですから、この人たちに信仰が無かったのか、と言えば、そうではないでしょう。今日の、重い皮膚病を患った人々はみんな、信仰を持っていたことを話さなければなりません。

このルカによる福音書の５章には、そこにもイエス様が重い皮膚病を患っている人を癒された話があります。この時には、患っている人が「御心ならば、わたしを清くすることができます、と言いますと、イエス様は直接、手を差し伸べてその人に触れて「よろしい。清くなれ。」と言われました。

ところが、今日の１０人は、イエス様に直接触れていただいてはいません。遠くに立ち止ったまま、声を張り上げて、「イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください。」と言いました。それに対してイエス様もその人たちを見て、「祭司たちのところへ行って、体を見せなさい。」と言われただけです。でも、この人たちは、イエス様の言葉を信じて祭司たちのところへ行く決断をするのです。これは、御言葉を信じて、素直に従う信仰による決断と言えるでしょう。

この１０人とイエス様が、どうして遠く離れていたか、皆さんご存知でしょう。

旧約聖書の三番目の書物。レビ記の１３章４５節からですが、このようなことが書かれています。
『13:45 重い皮膚病にかかっている患者は、衣服を裂き、髪をほどき、口ひげを覆い、「わたしは汚れた者です。汚れた者です」と呼ばわらねばならない。 13:46 この症状があるかぎり、その人は汚れている。その人は独りで宿営の外に住まねばならない。』

全く世間から隔離されて、人が近づいて来たら、そのたびに「わたしは汚れた者です。汚れた者です」と叫ぶ。このように決められて、健康な人が病気にならないような規定を作っていたのです。しかし、病気の人から見たなら、こんなことを繰り返さなければならない生活はどんなに辛いことでしょう。彼らは、この叫びをするたびに、自分が救いようのない泥沼の生活をしていることを自覚せざるを得ませんでした。叫べば叫ぶほど、自分がみじめになってしまったのではないでしょうか。私自身、先日コロナに感染し、知らずに日曜日に教会に来た旅の人に帰ってもらった時、そんな気持ちになりました。

今日の病気だった人たちはそんな生活から抜け出したかったに違いありません。彼らは、自分が汚れた者であることを叫ぶよりも、イエス様に助けてほしかったでしょう。救いのために、声を張り上げたかった。そして、今まさに、エルサレムへ向かう途中のイエス様に出会えたのです。きっと５章の、重い皮膚病を治していただいた人のことを噂で聞いて、この時とばかり、大声で呼びかけたのでしょう。その呼びかけた姿勢や、「祭司たちのところへ行って、体を見せなさい。」というイエス様の声を聞いた後の行動。それは、み言葉を信じた、からし種一粒や、百人隊長の信仰に通じるものだったはずです。

そして、この１０人は祭司たちの所へ出かけてゆく途中で、清くされたのです。

ところが、ここで、１人のサマリア人と９人のユダヤ人を分ける、もう一つの信仰の問題が出てきました。イエス様は、この１０人に「祭司たちのところへ行って、体を見せなさい。」と言ったのですから、忠実に行動したのは、ユダヤ人９人だったのです。しかし、イエス様は、引き返したサマリア人をほめます。

それは、自分を治してくださったのが、イエス様だったので、「それに対する感謝の気持ちを表したかった。」「恩知らずと思われたくなかった。」ということも考えられますが、この人は引き返した時、イエス様の足もとにひれ伏して感謝しました。「この方が、私を癒してくださった、力ある方だ」とわかったら、その方の所に留まりたい。そんな気持ちになるのではないでしょうか。

イエス様の足もとにひれ伏したこと。これは、イエス様を救い主、メシアとして礼拝することを意味しています。これが、他の９人とは違っていたのでしょう。

９人は、自分たちの元一緒にいた家族のもとへ帰って行ったのでしょう。そして、回復した人が献げることになっているレビ記に記された献げ物を、規定通り献げたでしょう。そして、以前のように楽しく暮らせるように、と努力したと思います。人々は苦しい状況にある時、そこから抜け出したくて、必死で救いを願います。これは大切な信仰です。

しかし、元気になったら、終りなのではなく、その体験から自分が学んだこと、新しい生き方。神様と共にいることを喜べることが、何より大切なのです。それが、イエス様の足ものにひれ伏す姿勢でわかるでしょう。

放蕩息子は、放蕩をやめるだけではなく、父の家に帰ることが大切だと気づいたのでした。しかし、放蕩をしなかった兄は、父親から、家に入るように呼びかけられても入ろうともしませんでした。これが、そのまま、９人の帰ってこなかったユダヤ人たちの生きざまに通じるのだろうと思います。

私たちにとって大切なこと。それは、今日の特祷の呼びかけにあるように、「わたしたちの避けどころ、力であり、信仰の源である神」その方と共にいることなのです。私たちがいつも神様の愛を感じられるように、み言葉に親しみ、愛の業に励んで、喜びを分かち合う生活をしたいと思います。

（１か月前にはここで終らせていましたが、もう少し語る必要を感じて補足します。）

サマリア人がイエス様の足元にひれ伏した、ということについて説明したくなったのです。

ヨハネによる福音書４章の初めには「イエスとサマリアの女」というお話があります。イエス様たちが南のユダヤから北のガリラヤに向かう時、どんな事情があったかわかりませんが、ユダヤ人が普通は避けて遠回りをする道を選ばず、イエス様たちはユダヤ人の嫌うサマリアを通ることになったのです。そして、旅の疲れで井戸のそばで休んでいると、その町で、人々を避けるように、暑い昼間に水を汲みに来た女の人に「水を飲ませてください」と声をかけます。

その女の人とイエス様との会話が続きますが、この後、イエス様に勇気づけられたのか、彼女は町の人々の前で堂々と「私のことを言い当てた人と出会った。この人がメシアかもしれない。」と証言し、町の人たちもイエス様の所に会いに来た話に展開します。

ただ、私が言いたいのは、この女の人と、イエス様の会話の中で、サマリア人とユダヤ人の習慣の違いから、一歩進んで新しい信仰の形がここに示されている、ということです。

会話の中でこんな会話があります。

4:19 女は言った。「主よ、あなたは預言者だとお見受けします。
4:20 わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」

これは、イスラエルの国が分裂した時、南ユダ王国はエルサレムで礼拝し、北イスラエル王国では、エルサレムに行かず、サマリア郊外のゲリジム山で過ぎ越しの祭りを行っていることを言っているのです。そしてそれは現代まで続いています。しかし、もはやそんな古い習慣ではなく、新しい信仰の在り方で生きる道が示されている、と言いたいわけです。

4:21 イエスは言われた。「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。
4:22 あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからだ。
4:23 しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。
4:24 神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」
4:25 女が言った。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」
4:26 イエスは言われた。「それは、あなたと話をしているこのわたしである。」

重い皮膚病を癒されたサマリア人がイエス様の足元にひれ伏した、というのは、そういう意味があるんだ、ということを補足したくて、書き足しました。